

Akṣarāśisūtra の引用と変遷

早 島 慧

0. 序論

『大乘莊嚴經論』(Mahāyānasūtrālamkāra[-bhāṣya]: MSA [-Bh]) 第 III 章「種姓品」k.2には、「界が無量であること」の典拠として“*Akṣarāśisūtra*” (ARS) が引用される。この ARS は三乗説の典拠として、或いは無漏種子説に関する論争において典拠とされるものであり、インド・チベット・中国において経証としてたびたび言及される重要な經典である。

拙稿〔2019〕では、“*Akṣarāśisūtra*” という『アクシャ樹果 (*akṣa*) の堆積 (*rāsi*) 經』とでも訳すべき経名が、漢訳『大乘莊嚴經論』では「多界修多羅」と全く異なる訳語となっている点を問題として、次の結論を導いた。⁽²⁾

- ・ Prabhākaramitra 訳の用例を見る限り、「多界修多羅」は固有名詞としての経名ではなく、「多界を説く經典群」を意味すると考えられる。したがって、「多界修多羅」という訳は ARS を『多界經』として訳したものではない。
- ・ 二種の ARS が確認され、無性釈所引の ARS では当該の文脈に対する経証としては不十分であり、Prabhākaramitra はこの ARS の存在を考慮して「多界を説く經典群」を意味する「多界修多羅」と訳した可能性が考えられる。

拙稿では MSABh に対する二つの複注、無性 (Asvabhāva) 造 *Mahāyānasūtrālaṃkāra-tīkā* (MSAT) と安慧 (*Stthiramati*) 造 *Sūtrālaṃkāra-vṛtti-bhāṣya* (SAVBh) とに引用される ARS の内容的差異に着目し、二種の ARS の存在を指摘した。本稿では、ARS に言及する仏典を検証し、ARS が二種類存在するに至った背景について考察する。

1. 問題の所在 (二種の Akṣarāśisūtra)

ARS は、多くの果実をつけるアクシャという樹木の比喻によって、界 (要素) に関する「多さ」を説く經典である。MSABh 第 III 章「種姓品」k.2 は、界の区別があるために声聞種姓などの種姓が存在するとして、「界の区別が無量であること」の典拠として ARS を引用する。

MSABh (早島編 [2024: 25]⁽³⁾)

諸々の衆生には様々な界があるので、界の区別は無量である。〔界の区別が無量であるのは〕『アクシャ樹果の堆積經』に述べられている通りである。それゆえ、界の区別がそういった類のものであると承認されるべきであるので、三乗における種姓の区別がある。

MSABh は界の区別の無量を説く経証として、ARS に言及する。ただし、ARS の经文自体は引用されていない。これに対して、MSABh に対する注釈書である MSAT および SAVBh には、その经文が引用される。

MSAT (早島編 [2024: 67]⁽⁴⁾)

比丘たちよ、例えば、アクシャ樹果の堆積は、高さにして一ヨージアナ、幅にしても一ヨージアナである。そのアクシャ樹果の堆積から、百年経過するごとに、ある者がアクシャ樹果を一つずつ取り出して、『このアクシャ樹果はある界に投げ入れた』『このアクシャ樹果は〔別の〕ある

界に投げ入れた』と、そのようにいっ〔て、数え〕たでしょう。その場合には、このアクシャ樹果の堆積は、すぐに無くなり尽きてしまうだろうが、界はそのように尽きてしまうことはない。

SAVBh (早島編 [2024: 103]⁽⁵⁾)

比丘たちよ、〔例えば、〕高さにして一ヨージアナほど、幅にしても一ヨージアナほどのアクシャ樹果の堆積があるが、そのアクシャ樹果の堆積から、ある者が百年経過するごとに、一つのアクシャ樹果を取り出して、『このアクシャ樹果は声聞の界に属する、このアクシャ樹果は独覚の界に属する』といっ〔て、このアクシャ樹果を数え〕たとしても、このアクシャ樹果は直ぐに尽きて無くなってしまいが、衆生の界はそのように尽きてしまうことはない。

両論が引用する ARS は概ね一致しているが、下線部で示すように、「声聞の界」・「独覚の界」と衆生の界の区別を説く SAVBh 所引の ARS に対して、MSAṬ 所引のものではその区別が明確でなく、「界の区別の無量」を示す経証としては十分とは言えない。両論は、この直後に引用される『多界経』(*Bahudhātukasūtra) と関連づけて「多さ」を論じるが、その関連性についても、

MSAṬ (早島編 [2024: 69]⁽⁶⁾)

『多界経』と結びつけるならば、界の区別は多種あって、

SAVBh (早島編 [2024: 103]⁽⁷⁾)

『多界経』と結びつけるならば、眼などの界が様々に示されるという観点から、界は無量である。

と、下線部の差異をみせる。すなわち、界の区別を説く SAVBh 所引の

ARS に対して、MSAT 所引のものでは界の区別は説かれず、『多界経』と結びつけることによって界の区別が論じられる。この差異について、袴谷 [1981: 140, n.32; n.34] ([2001: 248, n.32; n.34]) は「安慧釈によれば『あるアクシャの実は声聞の界に属し、他方のアクシャの実は独覚の界に属す』という意味になる。そこに、無性釈所引の段階から安慧釈所引の段階へとこの経典が展開した形跡が認められる」、「安慧釈は『有情界 (sems can gyi khams)』とする。「有情」という限定は、後代の付加を思わせる」と述べ、安慧釈での発展および後代の付加の可能性を指摘している。

また、ASR と『多界経』との関連についての、袴谷 [1981: 133] ([2001: 241]) による「両註釈の説明から想像すれば、Akṣarāśi-sūtra は akṣarāśi (アクシャの実の堆積) の比喻によって界自体の不滅を述べることを主眼とし、Bahudhātuka-sūtra は種々の観点から界の多様性を説明することを主眼としていた経典だったのではないだろうか」という指摘は、両釈所引の ARS の差異を考える上で、重要な指摘であろう。MSAT 所引の ARS には界の多様性⁽⁸⁾が説かれず、『多界経』において界の多様性が説かれるのに対し、SAVBh 所引の ARS では界の区別が説かれ、界の多様性に関する内容が含意されている。

以上のように、両釈所引の ARS には「界の区別」に関する差異が見られる。この点について、袴谷の指摘する発展および後代の付加という観点から、ARS に言及する諸論書を考察し、なぜ ARS が二種類存在するようになったのか、その要因を検討する。そして、この二種の ARS の相違に関する考察は、先行研究において議論されてきた MSAT と SAVBh の成立順序の問題と密接に関わるものである。両釈の先後関係については、先行研究においても繰り返し議論されてきたが、いずれが ARS を改変したかという点は、その成立順序を示す重要な手がかりとなる。本稿では、ARS の変遷に関する考察を通じて、両釈の先後関係を明らかにする一助とすることを目的とする。

2. Akṣarāśisūtra について

ARS の変遷を考察するに先立ち、この經典自体について確認しておきたい。すでに、袴谷 [1981: 135-136] ([2001: 243-244]) が指摘するように、MSAṬ および SAVBh に引用される ARS と概ね一致するものが『雜阿含經』No.444にみられ、これが ARS の古形を伝えるものと考えられる。『雜阿含經』No.444の内容については後に検討するが、MSABh が示すような *Akṣarāśisūtra* という經典名では呼ばれていない。この經典名で呼ばれるようになるのはおそらく MSABh が最初であり、それ以前の文献にはこの經典名は確認されない。例えば、〈婆沙論〉は次のように ARS に言及する。

『鞞婆沙論』(T [28] 448b27-c1)

佛所說契經以大樹作喩說…佛契經以見名說界…

『阿毘曇毘婆沙論』(T [28] 279b21-26)

佛經作如是喩。如大樹葉聚…如多界經說…

『阿毘達磨大毘婆沙論』(T [27] 367c1-6)

餘契經中世尊自說惡叉聚喩…多界經…

〈婆沙論〉では、『多界經』という經典名が確認されるが、ARS については三訳いずれにも經典名の明示はない。瑜伽行派の文献でも、『瑜伽師地論』(『瑜伽論』)が「如經說惡叉聚喩」と説くように、MSABh 以前の文献では經典名が示されていない。一方、MSABh において *Akṣarāśisūtra* という名称が用いられた後は、MSAṬ で *Ba ru ra'i mdo* (**Akṣasūtra*), SAVBh で *Ri lu'i phung po bstan pa'i mdo* (**Akṣarāśinirdeśasūtra*), さらに Ratnākaraśānti は *Ba ru ra'i mdo* (**Akṣasūtra*), Jñānavajra は *Ba ru ra'i phung po'i mdo* (**Akṣarāśisūtra*) と經典名を挙げており、MSABh 以降に *Akṣasūtra* や *Akṣarāśisūtra* という經典名で呼ばれるようになったことがうかがえる。

次に ARS の内容そのものを確認することとしたい。前述のように、『雑阿含經』No.444は ARS の古形を伝えるものである⁽¹⁰⁾。

次のように私は聞いた。ある時、世尊は舍衛国の祇樹給孤独園におられた。その時、世尊は諸々の比丘に語りかけられた。「例えば、眼藥丸（アクシャ樹果⁽¹¹⁾の堆積）が深さ、幅がそれぞれ一ヨージャナあったとして、もしある人がこの藥丸を取って、それぞれの界に安置したとすれば、その界に対してすぐに〔藥丸は〕尽きてしまうが、界にはその限界がない。同様に、まさに諸々の界はその数が無量であると知るべきである。これ故に比丘よ、界の学に巧みになり、種々の界（種種界）に巧みになるべきである。まさにこの様に学べきである」と。世尊がこの經典を説き終わって、諸々の比丘は世尊の教えを聞いて歓喜奉行した。

『雑阿含經』No.444は、非常に多くの数のアクシャ樹果であっても界に対応させていくと、先にアクシャ樹果は尽きてしまうが、界は尽きることないので、その数は無量であると述べる。この点では、No.444は界の「多さ」を説いていると言える。その一方で、界の区別は説かれぬものの「種種界」と、その界が多様であることも示唆されている。つまり、比喩においては界の「多さ」が説かれる一方で、界の「多様さ」を知るべきと結ばれることから、両方の意図を含意する經典として理解されるのである。この点は、後述する諸論書における ARS の引用意図と密接に関連するものである。

また、No.444における「界界」について山部 [1987: 24] は『「界界」についても、二通りの解釈があり得る。恐らく本經典の当面の趣旨は、『婆沙論』や『成論』の引用が示す様に、一人一人の有情の中にある無数の可能性を数えることにあるのであろうが、SAVBh 所引の Akṣarāśisūtra が、数えるべき一々の界を『声聞界 (ñān thoṣ kyi khaṃs)』『独覺界 (rañ saṅs rgyas kyi khaṃs)』と言い換えることから知られるように、ある特定の界によって特徴づけられ、種々異なった機根を持つ一人一人の有情そのものを数えてい

るものと解することが可能なのである。恐らくは SĀ（あるいは SN）の構造自体が、本質的にかかる両様の解釈を同時に imply するものなのであろう」と指摘する。この界の「多さ」と「多様さ」の区別は、『雑阿含經』No.444 ではそれほど意識されていなかったと思われるが、この区別が後の經典引用者によって、引用目的の相違として明確になってくるのである。

ところで、この Akṣa という樹木は、和久 [2013: 10-11] では和名インドジュズノキとされるが、早島編 [2024: 156, n.14] でも指摘した様に Akṣa は Vibhītaka という樹木の同義異語 (paryāya) とされる⁽¹²⁾。そして、この Vibhītaka は和久 [2013: 90] によれば、和名セイタカミロバランとされており、インドジュズノキとセイタカミロバランという異なった樹木が、当時 は同一の樹木の別名として認識されていたのである。

3. Akṣarāśisūtra の引用

3-1. 〈婆沙論〉所引の Akṣarāśisūtra

ARS に言及する最初の論書が〈婆沙論〉と考えられる。

『阿毘達磨大毘婆沙論』⁽¹³⁾

ある經典に世尊自ら、アクシャ樹果の堆積（惡叉聚）の比喩を説く。この比喩を説き終わって、諸々の比丘に「衆生の身中には多界性がある」と告げた。それもまたこの十八界に摂められる。所依（眼界乃至意界）・能依（眼識界乃至意識界）・境界（色界乃至法界）に摂められるからである。また、佛はかの『多界經』において、界の区別に六十二種があると説く。それもまたこの十八界に摂められる。つまり、所依などの三事が摂められるからである。

〈婆沙論〉は諸經典に説かれる界と十八界の関係を論じるにあたって、ARS と『多界經』について論じる。〈婆沙論〉は衆生の界の「多さ」を説く經典

として ARS を、六十二界という「多様さ」を説く經典として『多界経』を挙げ、そこに説かれる「界」は全て十八界に摂められると論じる。この点では、ARS を界の無量性を説く経証として、『多界経』を界の区別（多様性）を説く経証として論じる MSAT と共通している。おそらく、MSAT や SAVBh が ARS と『多界経』を併わせて説く背景には、この〈婆沙論〉の文言があるものと考えられる。

ただし、『阿毘達磨大毘婆沙論』が「有情身中有多界性」というように「衆生の界」と論じるのに対して、『鞞婆沙論』（界亦兩數）、『阿毘曇毘婆沙論』（無量界性亦復如是）には「衆生」についての言及はなく、先に確認した『雜阿含経』No.444にも「衆生」という文言は存在しない。そのため、玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』の段階で付加された可能性も想定される。

3-2. 『瑜伽師地論』所引の Akṣarāśisūtra

次に、アクシャ樹果の比喻に言及する『瑜伽論』「摂事分」（*Vastusaṃgrahaṇī*: VSg）に注目してみたい。

⁽¹⁴⁾
VSg

要約して、それら十八と認識されている界は、ここではそれぞれの界も業・趣、そして衆生が無量であると知るべきであり、例えば、諸々のアクシャ樹果の大きなアクシャの堆積は一つの種類（*rigs*）であるので堆積に属する諸々のアクシャ樹果に対して「一つ」と言うが、これらのアクシャ樹果は無量である。同様にそれぞれの界もまた無量であるが、一つの種類であるので「それぞれ」と言われると説かれるのである。

VSg もまた、アクシャ樹果の比喻を用いて「界の多さ」を示しているが、注目すべきは「数」と「種類」についてである。この一節はアクシャ樹果（界）の「数」は無量であるが、その「種類」は一つであると解説する。つまり、界の「多さ」が説かれる一方で、界の「多様さ」については論じてい

ないのである。VSg は ARS は「多様さ」を説く経典ではなく、「多さ」を説く経典として理解しているものと考えられる。

さらに、同じく『瑜伽論』「摂決擇択分」(Viniścayasamgrahāṇī. VinSg) にもまたアクシャ樹果の比喻が確認される。

⁽¹⁵⁾
VinSg

また世尊によって、一切の種子を有するこのアーラヤ識を意図して、眼界・色界・眼識界〔乃至〕眼界・法界・意識界に至るまでが説かれた。アーラヤ識には様々な界 (*nānā-dhātu) があるからである。経典にもアーラヤ識に多くの界 (*aneka-dhātu) がある〔と説かれている〕からである。アクシャ樹果の堆積の比喻をなしたように。

VinSg は、「様々な界 (*nānā-dhātu)」について論じた後に、「多くの界 (*aneka-dhātu)」について論じ、その経証として ARS に言及する。つまり、この一節においては、先の VSg と同様に、ARS は「多様さ」ではなく、その数の「多さ」を説く経典として位置付けられている。ただし、「様々な界があるのは、経典に多くの界があると説かれている」と、両者が関連していることも論じられる。この両者の関係性については、同じ VinSg の他の箇所においても論じられる。

⁽¹⁶⁾
VinSg

様々な界 (*nānā-dhātu) とは何か。十八界が相互に異なる特徴を有することである。多くの界 (*aneka-dhātu) とは何か。まさに、それら無数で多様な衆生の区別が依拠するものである。無量の界 (*apramāṇa-dhātu) とは何か。それら二つが一つにまとめられたものを、無量の界と名づける。アクシャ樹果の堆積の比喻によって、「私は諸々の界には、界の限界があるとは説かない」と説かれている通りである。

ここでは、先の VinSg で論じられた「様々な界」と「多くの界」が解説され、その両者を合わせたものを「無量の界」とした上で、その経証として ARS を挙げる。つまり、先の箇所では ARS は、「多くの界」の経証とされていたが、この箇所では「様々な界」と「多くの界」とを合わせた「無量の界」の経証として位置付けるのである。先に確認した、ARS の古形を伝える No.444 は、比喩においては界の「多さ」を説く一方で、末尾ではその界が多様であることも示唆されていた。そのため、No.444 は、両方の意図を含意する経典としてすることが可能なものであり、VinSg は両者を含意する経典とみなした上で、「無量の界」の経証として挙げるのである。

MSABh に先行する資料として、ARS の古形を伝える No.444、ならびにアクシャ樹果の比喩を用いる〈婆沙論〉、『瑜伽論』の用例を確認した。〈婆沙論〉では、「界の多さ」を説く経典として ARS を挙げる一方、「界の区別」を説く経典として『多界経』を挙げている。これは、後の MSAT および SAVBh において、両経が併せて引用される背景をなすものと考えられる。一方、『瑜伽論』においても ARS は「界の多さ」を説く経典として位置づけられているが、ここでの「界の多さ」は単なる数量的な多さだけではなく、「多様さ」とも関連づけられている。すなわち、ARS は界の「多さ」と「多様さ」の両方を説く経典として理解されているのである。

このような背景を踏まえると、MSABh が ARS を「界の区別の無量性」を説く経典として理解したのは、No.444 において界の「多さ」と「多様さ」が明確に区別されていなかった点、さらには『瑜伽論』における両概念に対する解釈が影響していると推測される。さらに、本稿が検討対象とする「衆生の界」という限定表現については、玄奘訳の〈婆沙論〉を除いて他に確認されず、袴谷が指摘するように、これは後代に付加された可能性が高いと考えられる。

4. 二種の Akṣarāśisūtra について

以上の考察を踏まえて、MSAT と SAVBh とが引用する ARS を再度確認することとしたい。

MSAT (早島編 [2024: 67])

比丘たちよ、例えば、アクシャ樹果の堆積は、高さにして一ヨージアナ、幅にしても一ヨージアナである。そのアクシャ樹果の堆積から、百年経過するごとに、ある者がアクシャ樹果を一つずつ取り出して、『このアクシャ樹果はある界に投げ入れた』『このアクシャ樹果は〔別の〕ある界に投げ入れた』と、そのようにいつ〔て、数え〕たでしょう。その場合には、このアクシャ樹果の堆積は、すぐに無くなり尽きてしまうだろうが、界はそのように尽きてしまうことはない。

SAVBh (早島編 [2024: 103])

比丘たちよ、〔例えば、〕高さにして一ヨージアナほど、幅にしても一ヨージアナほどのアクシャ樹果の堆積があるが、そのアクシャ樹果の堆積から、ある者が百年経過するごとに、一つのアクシャ樹果を取り出して、『このアクシャ樹果は声聞の界に属する、このアクシャ樹果は独覚の界に属する』といつ〔て、このアクシャ樹果を数え〕たとしても、このアクシャ樹果は直ぐに尽きて無くなってしまいが、衆生の界はそのように尽きてしまうことはない。

先にも述べたように、MSAT と SAVBh が引用する ARS は非常に類似している。MSAT と SAVBh とは、多くの箇所類似しており、どちらかがもう一方を参考に著されたことは、疑いようがない。しかしながら、下線部において明確な相違が見られる。MSAT 所引のものは、樹果を界に投げた場

合に、樹果はなくなるが界はなくなることはなく、界は無量であると論じ、界の区別は言及されない。その一方で、SAVBh 所引のものでは、「声聞の界」等と界の区別に言及し、「衆生の界」という限定も確認される。

本箇所において注目すべき点は、MSAṬ が引用する ARS が経証としては不十分であるということである。すなわち、経証として成立するためには、「界 (dhātu)」の区別が多様であることが明確に説かれている必要があるが、MSAṬ の引用においては、この「区別」についての言及が見られない。そのため、MSAṬ は〈婆沙論〉と同様に、「『多界経』と結びつけるならば、界の区別は多種あって」として、『多界経』を補足的に引用することで、経証としての正当性を補完している⁽¹⁷⁾。これに対して、SAVBh における引用は、界の区別についての言及を含んでおり、それ自体で経証として成立している。すなわち、SAVBh においては『多界経』を引用する必要がなく、その意味でも MSAṬ とは異なる構成を示しているのである。

先行研究において、MSAṬ と SAVBh の成立順序について議論がなされてきたが⁽¹⁸⁾、本箇所に見られる ARS の引用に注目するならば、MSAṬ が先行し、それを踏まえる形で SAVBh が著されたと考えるべきであろう。SAVBh もまた ARS の直後に『多界経』に言及しているが、SAVBh に引用された ARS 自体がすでに経証として完結しているため、本来『多界経』を引用する必要はない。このことから、SAVBh における『多界経』の言及は、内容的な必然性に基づくものではなく、MSAṬ の構成を参照した結果として形式的に導入されたものであると推察される。すなわち、MSAṬ では『多界経』によって補完する必要があったため、その影響を受けた SAVBh においても、実質的には不要でありながら、『多界経』への言及が踏襲されたものと考えられる。

SAVBh 所引の ARS が MSAṬ 所引のものとは別の伝承として存在した可能性も否定できないが、先に確認した古形を残す No.444 と、玄奘訳を除く〈婆沙論〉、『瑜伽論』の用例には「衆生の界」等への直接的な言及は確認できず、その可能性は考えにくいであろう。

No.444は、比喩においては界の「多さ」が説かれる一方で、界の「多様さ」を知るべきと結ばれることから、両方の意図を含意する経典として理解される。そのため、『瑜伽論』では、両者の界を含む経典として位置付けられ、その影響がMSABhにも及んだものと推測される。これに対して、比喩のみに言及するMSATでは、『多界経』にも言及する必要ができたのである。以上の点を踏まえれば、SAVBh所引のARSは、その著者、安慧によって改変された可能性が考えられるのである。

それでは、安慧はどのような意図のもとで経典の改変を行ったのであろうか。当該箇所は、MSA-III k.2に対する注釈である。MSA-IIIは「種姓品」という章題が示すように、種姓を主題とし、そのk.2では種姓の存在性(gotra-astitva)を論じる。その際、(1) 界(dhātu)、(2) 性向(adhimukti)、(3) 実践(pratipatti)、(4) 結果(phala)という四種の区別に基づいて存在性を論じる。このうちの(1) 界の区別に関する注釈において、ARSが経証として言及される。

種姓とは衆生が本来的に有する資質を指す概念である。そのため、「界の区別が無量であるから三乗の種姓が存在する」と主張するMSAの議論において、界とは必然的に「衆生の界」でなければならない。しかしながら、No.444が示す古形のARSにおける「界」の語は、必ずしも衆生の界に限定されたものではない。したがって、ARSを種姓に関する経証として用いるために、界を衆生に限定したと考えられる。加えて、三乗の種姓の区別を明示するためには、「声聞の界・独覚の界」への具体的言及が求められる。その結果として、安慧はこれらの限定句を挿入するという改変を施したものと推測される。

そして、「衆生の界」を含み、「界の多様さ」を論じるSAVBh所引の形のARSは、その後の諸文献にも踏襲されている。例えば、ラトナーカラシヤーンティ(Ratnākaraśānti)は『経集解説・宝明莊嚴論(Sūtrasamuccayabhāṣyāratanālokāṃkāra)⁽¹⁹⁾』において、ARSを引用する。これは龍樹に帰せられる『経集(Sūtrasamuccaya)』に対する注釈書であり、『陀羅尼自在経

(*Dhāraṇīśvararājasūtra*)』に見られる nānāprakṛtihatukān という語句⁽²⁰⁾の「様々な (nānā)」に関する解説において ARS を引用する。

Sūtra-samuccaya-bhāṣya-ratnālokalāṃkāra⁽²¹⁾

「本性 (prakṛti)」とは、界 (*dhātu) である。「様々な」(nānā) とは『アクシャ樹果経』に「アクシャ樹果の堆積はスメール山と同じほどの高さであるが、ある人が『この衆生の界はこの如くである』と述べ、アクシャ樹果の堆積から一つずつ投げても、アクシャ樹果の堆積は尽きてしまうことはない」と説かれる如くである。

先に確認した VinSg では、「多くの界 (*aneka-dhātu)」あるいは「無量の界 (*apramāṇa-dhātu)」の経証として ARS を引用していたが、nānāprakṛti の本性 (prakṛti) が界 (dhātu) と言い換えられることから、ここでは「様々な界 (nānā-dhātu (prakṛti))」の経証として ARS が引用されるものと理解される。そして、問題の「衆生の界」という限定も含まれている。つまり、安慧が改変して引用したと考えられる形の ARS をラトナーカラシャーンティは踏襲するのである。

さらに、ジュニャーナヴァジュラ (Jñānavajra)⁽²²⁾ による『楞伽経 (*Laṅkāvatārasūtra*)』に対する注釈書 *Ārya-Laṅkāvatāra-nāma-mahāyānasūtra-vṛtti-tathāgatahṛdaya-alaṃkāra* においても、ARS は引用される。

Ārya-Laṅkāvatāra-nāma-mahāyānasūtra-vṛtti-tathāgatahṛdaya-alaṃkāra⁽²³⁾

他にも『アクシャ樹果の堆積経』に、「比丘たちよ、高さ幅がちょうど一ヨージアナほどあるアクシャ樹果の堆積から、100年ごとに一つずつ投げると尽きてしまうが、衆生たちの界は尽きることがない」と説かれるのである。

ここにも「衆生たちの界」という文言が確認され、SAVBh 所引の形の ARS

が後代に引用されていたことが窺えるのである。

5 結論

本稿では、ARS の引用とその変遷について、特に MSABh の注釈書である MSAṬ と SAVBh における引用の差異に注目して考察した。MSṬ 所引の ARS は、アクシャ樹果の比喻を用いて界の「多さ」を説くが、SAVBh 所引のものでは「声聞の界」・「独覚の界」といった区別が論じられ「多様さ」を説く經典となっている。さらには、「衆生の界」という表現も確認される。「界の区別の無量」の経証として不十分である ARS を引用する、MSAṬ が『多界経』を引用して補足しているのに対し、SAVBh では ARS 自体で経証として完結している点に重要な違いがある。このことから、SAVBh の ARS は MSAṬ の記述を発展させたものであり、SAVBh の方が後代に成立した可能性が考えられる。また、「衆生の界」という限定表現は後代に加えられた可能性が高く、SAVBh における ARS の改変とみることが妥当であろう。²⁴

この SAVBh 所引の ARS は、後代の文献にも踏襲されており、その結果、二種類の ARS が伝承されるに至ったと考えられる。

略号表

テキスト

MSA	<i>Mahāyānasūtrālaṃkāra</i> , See 早島編 [2024].
MSABh	<i>Mahāyānasūtrālaṃkāra-bhāṣya</i> , See MSA.
MSAṬ	* <i>Mahāyānasūtrālaṃkāra-ṭikā</i> , See 早島編 [2024].
SAVBh	* <i>Sūtrālaṃkāra-vṛtti-bhāṣya</i> , See 早島編 [2024].
VSg	<i>Vastusaṃgrahaṇī</i> , D No. 4039, P No. 5540.
VinSg	<i>Viniścayaṃgrahaṇī</i> , D No. 4038, P No. 5539.

書籍と学術論文

Griffiths, Paul J.

[1990] “Omniscience in the *Mahāyānasūtrālaṃkāra* and its commentaries”,
Indo-Iranian Journal, 33.

Kurihara, Shodo (栗原尚道)

[1989] “Asvabhāva’s Commentary on the *Ālokāmālā*”, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 37-2.

Lindtner, Christian

[1982] “Adversaria Buddhica”, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, 26.

[1985] “A Treatise on Buddhist Idealism: Kambala’s *Ālokāmālā*”, *Miscellanea Buddhica*, Indiske Studier V. Copenhagen, Akademik Forlag.

Pind, Ole Holten

[2015] *Dignāga’s Philosophy of Language. Dignāga. Pramāṇasamuccayavṛtti V on anyāpoha. Part II: Translation and Annotation*, ed. E. Steinkellner. Vienna 2015.

Ye, Shaoyong

[2021] “A Preliminary Report on a Sanskrit Manuscript of the Tathāgatamahākaraṇānirdeśa or Dhāraṇīśvararāja”, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 69-3.

岩本明美

[2010] 「唯識思想の研究——『大乘莊嚴經論』チベット訳・安慧釈・無性釈の相互関係と留意点——」, 『佛教文化研究所紀要』, 49.

越智淳仁

[2009] 『法身思想の展開と密教儀礼』, 法藏館.

佐久間秀範

[2013a] 「無性と安慧」, 『法華仏教と関係諸文化の研究：伊藤瑞毅博士古稀記念論集』, 山喜房仏書林.

[2013b] 「註釈家ステイラマティは一人か?」, 『仏教学』, 55.

高崎直道

[2009] 『如来蔵思想の形成 II』(高崎直道著作集 第五卷), 春秋社.

塚本啓祥・松永有慶・磯田熙文編

[1990] 『梵語仏典の研究 III 論書篇』, 平楽寺書店.

袴谷憲昭

[1979] 「*Viniścayasamgrahani* におけるアーラヤ識の規定」, 『東洋文化研究所紀要』 79, (1)-(79), (袴谷 [2001: 362-445] 所収).

[1981] 「三乗説の典拠——*Akṣarāśi-sūtra* と *Bahudhātuka-sūtra* ——」, 『古田紹欽博士古稀記念論集 仏教の歴史的展開に見る諸形態』 創文社, 127-142 (袴谷 [2001: 236-251] 所収).

[2001] 『唯識思想論考』, 大蔵出版.

早島慧

[2014] 『中観・瑜伽行両派における二諦説解釈の研究——『大乘莊嚴經論』第

VI 章「真実品」を中心として——』、龍谷大学博士論文。

[2019]「『大乘莊嚴經論』『種姓品』における *Akṣarāśisūtra* ——何故「多界修多羅」と訳されたのか——」、『印度学仏教学研究』、68-1, (163)-(168).

早島慧編

[2024]『『大乘莊嚴經論』第三章の和訳と注解——菩薩の種姓——』、法藏館。
松本史朗

[1982]「*Madhyamakāloka* の一乗思想」、『曹洞宗研究員研究生研究紀要』14, (1)-(46).

望月海慧

[2005]「ラトナーカラシャーンティ『經集解説・宝明莊嚴論』和訳（1）」、『身延論叢』10, (1)-(40).

[2010]「ラトナーカラシャーンティ『經集解説・宝明莊嚴論』和訳（6）」、『身延論叢』15, (1)-(90).

山部能宜

[1987]「初期瑜伽行派に於ける界の思想について——*Akṣarāśisūtra* をめぐって——」、『待兼山論叢』哲学篇21, 21-36.

[1989]「種子の本有と新熏の問題について」、『日本佛教学会年報』54, 43-58.

結城令聞

[1935]『心意識論より見たる唯識思想史』、東方文化学院東京研究所。

吉村誠

[2011]「唯識学派の種子説——真如所縁縁種子から無漏種子へ——」、『駒澤大学仏教学部研究紀要』69, 86-91.

和久博隆 [2013]『新装版 仏教植物辞典』、国書刊行会。

キーワード *Akṣarāśisūtra*, 『多界經』, 『大乘莊嚴經論』, 無性, 安慧

註

(1) 瑜伽行派の引用する ARS については袴谷 [1981], 山部 [1987] 等の先行研究に詳しい。また, ARS と関連した中国における無漏種子説の議論については山部 [1989], 吉村 [2011] を参照。

(2) 拙稿 [2019: 167] 。

(3) MSABh 早島 24:

nānādhātukatvāt sattvānām aparimāṇo dhātuprabhedo yathoktam
akṣarāśisūtre | tasmād evaṃjātiyako 'pi dhātubhedaḥ pratyetaḥ ity asti
yānatrayagotrabhedaḥ |

なお、本稿で用いる翻訳は、早島編 [2024] に拠りつつ、本稿の目的に即して適宜修正を加えたものである。

- (4) MSAT 早島 66:

dge slong dag | dper na ba (ba DCNG: bu P) ru ra'i phung po 'phang du
dpag tshad tsam | rgyar yang dpag tshad tsam zhig yod par gyur la | ba ru
ra'i phung po de las 'ga' zhig gis lo brgya lo brgya (lo brgya lo brgya PNG: lo
brgya DC) 'das shing ba ru ra re re zhig blangs te | ba ru ra 'di ni khams che
ge mo zhig tu dor ro || ba ru ra 'di ni khams che ge mo zhig tu dor ro zhes de
skad zer na | ba ru ra'i phung po de ni myur ba kho nar zad pa dang yongs
su gtugs par 'gyur gyi | khams ni de ltar yongs su gtugs pa ma yin no

- (5) SAVBh 早島 102:

dge slong dag ri lu'i phung po 'phang du yang dpag tshad gcig tsam la | chu
zheng du yang (du yang PNG: du DC) dpag tshad gcig tsam yod pa'i ri lu'i
phung po de las skyes bu la la zhig gis lo brgya'am lo brgya 'das nas ri lu
gcig blangs te | ri lu 'di ni nyan thos kyi khams su gtogs | ri lu 'di ni rangs
sangs rgyas kyi khams su gtogs zhes smras na yang ri lu de myur du (myur
du DCPN: myur G) zad cing med par 'gyur gyi sems can gyi khams ni de ltar
zad par mi 'gyur ro

- (6) MSAT 早島 68:

Khams mang po'i mdo dang sbyar na ni | khams kyi dbye ba rnam pa
mang po zhig yod do ||

- (7) SAVBh 早島 103:

Khams mang po bstan pa'i mdo dang sbyar na ni mig la sogs pa'i khams
tha dad par bstan pa'i sgo nas khams dpag tu med de (de DC: pa PNG)

- (8) この袴谷氏の理解に対して、松本 [1982: 36-37, n.16] は、MSABh,
SAVBh の記述をもとに、ARS を界の無量を説く經典と位置付ける。

- (9) 『瑜伽論』 T [30] 581b20.

- (10) 『雜阿含經』 T [2] 114c27-115a4:

(四四四) 如是我聞。一時佛住舍衛國祇樹給孤獨園。爾時世尊告諸比丘。譬
如眼藥丸。深廣一由旬。若有士夫取此藥丸。境界安置。能速令盡於彼界。界不
得其邊。當知諸界。其數無量。是故比丘。當善界學善種種界。當如是學。佛說
此經已。諸比丘。聞佛所說。歡喜奉行。

- (11) 「アクシャ樹果の堆積 (*akṣarāśi*)」に相当する箇所が『雜阿含經』では、
「眼藥丸」となっている。これについて、袴谷 [1981: 141, n.44] ([2001: 249,
n.44]) は「『眼藥丸』はおそらく *akṣarāśi* の訳であつたろうと思われる」とし
ながらも、「*akṣa* には『眼』の意味があるので、*akṣa-rāśi* を『眼藥丸』と訳し
たのであろうか。それとも *akṣa* 一語を『眼藥丸』と解し、*rāśi* にあたる語を
訳さなかったのであろうか。この後に示される『此藥丸』は一個ずつ出なければ
ならないから、その場合には *rāśi* の意味は含まれていないと考えねばなら

- ない」と述べている。袴谷 [1981: 139, n.22] ([2001: 247, n.22]) でも論じられるように、akṣa という言葉は、「サイコロ」、「樹木もしくはその果実」、「車軸」、「感覚器官」等の様々な意味を持つ。当該の ARS の文脈では、アクシャという「樹木もしくはその果実」という意味であるが、その多様な意味から、チベット訳では cho lo (サイコロ) や dbang po (感覚器官) とも訳される (Cf. 袴谷 [1981: 141, n.42; 141-142, n.49] [2001: 249, n.42; 249-250, n.49])。
- (12) Jinendrabuddhi の *Viśālāmālavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā* 第 V 章にも同様の文言が見られる。Cf. Pind [2015: 71, n. 248]
- yathākṣaśabde vibhītakāśabdasya |
例えば、akṣa という言葉に対して vibhīta という言葉 [をいうが] 如し。
- (13) 『阿毘達磨大毘婆沙論』 T [27] 367c1-6:
餘契經中世尊自說惡又聚喩。說此喩已告諸苾芻。有情身中有多界性。彼亦攝在此十八界。所依能依境界攝故。又佛於彼多界經中說界差別有六十二。彼亦攝在此十八界。即所依等三事攝故。
『韓婆沙論』 T [28] 448b27-c1:
佛所說契經以大樹作喩說。諸比丘如大樹葉。界亦爾數。此佛契經以見名說界。此亦盡入十八界中。以此三事故身依緣。
『阿毘曇毘婆沙論』 T [28] 279b21-26:
佛經作如是喩。如大樹葉聚。比丘當知。無量界性亦復如是。雖說無量界性。而不過十八界。盡以三事故名界。謂所依依境界。佛經又說六十二界。如多界經說。彼亦不過十八。盡以三事故名界。
- (14) VSg (D288b3-5, P330a6-8)
- mdor bsdu na khams bco brgyad po dmigs pa 'di dag ni 'dir khams re re zhing yang las ngang 'gro ba dang sems can sna tshogs kyi rnam pa'i bye brag gus tshad med par rig par bya ste | dper na cho lo rnams kyi cho lo'i phung po chen po (chen po D: om. P) ni rigs gcig pa'i phyir phung por gtogs pa'i cho lo rnams la gcig tu brjod mod kyi | cho lo de dag ni tshad med pa de bzhin (med pa de bzhin D: med bzhin P) du | khams re re zhing yang tshad med mod kyi rigs gcig pa'i phyir re rer bstan par (par D: pa P) mdzad do ||
『瑜伽師地論』「摂事分中契經事縁起食諦界摂摂」 T [30] 846c24-29:
復次以要言之。雖界種類十八可得。然一一界業趣有情種種品類有差別故。當知無量。譬如世間大惡又聚。於此聚中有多品類。種類一故。雖說爲一。而有無量。如是於其一一界中。各有無量品類差別。種類一故。雖各說一。而實無量。
- (15) VinSg (D7b3-5, P8b8-9a3, 袴谷 [1979: 39-40] [2001: 404-405])
- bcom ldan 'das kyi kyang kun gzhi rnam par shes pa sa bon thams cad pa 'di la dgongs nas mig gi khams dang | gzugs kyi khams dang | mig gi rnam par shes pa'i khams dang | yid kyi khams dang | chos kyi khams dang | yid

kyi rnam par shes pa'i khams kyi bar du gsungs te | kun gzhi rnam par shes
pa la khams sna tshogs yod pa'i phyir ro || mdo nyid las kyang kun gzhi
rnam par shes pa la khams du ma yod pa'i phyir ro || ji ltar dbang po'i tshogs
kyi dpe mdzad pa lta bu'o ||

「攝決擇分中五識身相應地意地」T [30] 581b17-21:

薄伽梵説。有眼界色界眼識界。乃至有意界法界意識界。由於阿頼耶識中有種種界故。又如經説惡又聚喩。由於阿頼耶識中有多界故。復次此雜染根本阿頼耶識。修善法故方得轉滅。

『決定藏論』T [30] 1020a25-28:

世尊依阿羅耶識爲一切種本。故説此言。謂眼界色界眼識界。乃至意界法界意識界。阿羅耶識中有種種性故。故説種本積聚譬喩。

Cf. 『顯揚聖教論』T [31] 567b10-12:

薄伽梵説。眼界色界眼識界。乃至意界法界意識界。由於阿頼耶識中有種種界故。又如經説惡又聚喩。

(16) VinSg (D79a3-4, P82b4-5)

khams sna tshogs pa nyid gang zhe na | ^akhams bco brgyad po dag phan
tshun mtshan nyid tha dad pa nyid gang yin pa'o || khams du ma pa nyid
gang zhe na | de dag nyid sems can sna tshogs dpag tu med pa'i rab tu dbye
bas gnas pa'o || khams tshad med pa nyid gang zhe na | ^a de gnyi ga gcig tu
bsdu pa la khams tshad med pa nyid ces bya ste | dbang po'i tshogs kyi dpes
nga ni khams rnams kyi khams kyi dpe mtha' yod par mi smra'o zhes ji skad
gsungs pa lta bu'o || (^a P om.)

「攝決擇分」T [30] 609c23-27:

云何種種界。謂即十八界展轉異相性。云何非一界。謂即彼諸界無量有情種種差別所依住性。云何無量界。謂總彼二名無量界。如佛世尊於惡又聚喩中説。我於諸界終不宣説界有邊際中。

(17) Prabhākaramitra が ARS を「多界修多羅（多界を説く經典群）」と訳した理由も、無性と同様に ARS が経証として不十分であると理解したことに由来すると思われる。Cf. 拙稿 [2019] .

(18) 従来、無性が安慧に先行するとする見解が主流であったが、Lindtner [1982: 192-193] [1985: 115] により、安慧が無性に先行する可能性が主張された。これに続き Kurihara [1989: 10-13] もまた、無性を法称以降、すなわち 7 世紀の論師と位置づけ、安慧より後代の論師とする見解を展開している。さらに Griffiths [1990] も、無性を 6 世紀後半の人物と見なし、安慧より後代の論師であるとする。このように、安慧が無性に先行するという理解は、塚本ほか編 [1990: 291-292] にも支持されており、近年では岩本 [2010] も、MSAT が SAVBh を前提として記された可能性を示唆している。

これに対し、佐久間 [2013a] は、上記のような安慧先行説に対して批判的な再検討を行っている。佐久間 [2013a: 749] は、Kurihara [1989] および Griffiths [1990] が依拠する論拠が、無性の年代を確定するには不十分であることを指摘し、安慧が無性に先行するという見解の基盤を再考する必要があると論じている。さらに佐久間 [2013a: 762] は、八識と四智の対応関係や、五性格別説に見られる思想内容の展開等に基づき、むしろ無性が安慧に先行するという理解の方が自然であると結論づける。Cf. 拙稿 [2014: 16-17] .

- (19) 『経集解説・宝明莊嚴論』については、望月 [2005] を参照。
 (20) 『陀羅尼自在經』の梵文は失われているが、当該の文言は『究竟一乘宝性論』の引用によって回収される。『陀羅尼自在經』については、高崎 [2009: 329-366] を、当該の文言については、高崎 [2009: 345-346] を参照。また、Ye [2021] は『陀羅尼自在經』の新出梵文写本について報告している。

- (21) *Sūtra-samuccaya-bhāṣya-ratnālokalāṃkāra* D299b1-2 :

rang bzhin ni khams so || sna tshogs pa ni Ba ru ra'i mdo las ji skad du | ba ru ra'i phung po 'phang du ri rab dang mnyam pa zhig la | skyes bu 'ga' zhig gis sems can 'di'i khams ni 'di lta bu'o zhes brjod cing | ba ru ra'i phung po las re re nas dor yang | ba ru ra'i phung po ni zad par mi 'gyur ro zhes gsungs pa lta bu'o ||

- (22) ジュニャーナヴァジュラについての詳細は不明だが、同じく『楞伽經』の注釈書を著したジュニャーナシュリーバドラより後の11世紀の人物と考えられる(越知 [2009: 222] 参照)。

- (23) *Ārya-Lankāvatāra-nāma-mahāyānasūtra-vṛtti-tathāgatahrdaya-alamkāra* D118b3-4 :

gzhan yang ba ru ra'i phung po'i mdo las | dge slong dag rgya dang rngams su dpag tshad tsam yod pa'i ba ru ra'i phung po las lo brgya brgya zhing re re phyung na zad par 'gyur la | sems can rnams kyi khams ni mi zad pa'o zhes gsungs pa dang |

- (24) 玄奘訳にのみ「衆生の界」という表現が見られることは、玄奘が安慧による改変の存在を認識していた可能性を示唆するものと考えられる。その場合、SAVBh は玄奘よりも以前に成立した文献であることになる。しかしながら、佐久間 [2013b] は、SAVBh を安慧の著作ではなく、むしろそれ以後の時代に成立したものであると論じており、この点については今後さらに慎重な検討を要する。

Cf. 『成唯識論』 T [31] 8a22-23:

如契經說一切有情無始時來有種種界。如惡又聚法爾而有。